第８分科会ー②
協　議　題　自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の推進
研究テーマ　キャリア教育の視点を生かした学校経営について
～自信を持って表現する子どもをめざして～

提案者　大分県由布市立西庄内小学校　校長　小出　和洋

１　はじめに

由布市は大分県中央部にあり，観光地として有名な湯布院がある人口約３万人の市である。

本校がある「湯布院町塚原地区」は由布市北部に位置し，北は宇佐市，東は別府市，西は玖珠町と接している。校区を取り巻くように，南の由布岳（標高 1,583m）をはじめ，伽藍岳・雛戸山など山々が連なっていて，標高 600 メートルの塚原高原のほぼ真ん中にあるのが塚原小学校である。風光明媚で湯布院の観光地の 1 つとして近年訪れる人が増えている。本市には小学校 10 校，中学校が３校ある。市内 13 校のうち，本校が唯一のへき地校である。また，１小学校校区に１自治区ということもあり，学校と地域の関わりが深く，それが学校の伝統にもなっている。しかし，近年はコロナ禍のため地域の方々との関わりをひかえてきたところもあったが，状況に応じてだんだんとかかわりを取り戻しつつある。

※　令和４年度末人事で，塚原小学校から西庄内小学校に異動となったため，勤務校は西庄内小学校であるが，塚原小学校の実践を報告する。

２　主題設定の理由

本校は 2006 年度より特認校となり，現在その制度を利用している児童２名を含む20名が学んでいる。

本校の子どもたちは，明るく素直で学習活動にもまじめに取り組むことができる。学校生活の中心である縦割り班活動も，6 年生を中心に自主的に取り組んでいる。しかし，その取組はこれまでの活動を継承して繰り返し行っているものが多く，その取組に対する課題意識や自分の思いを持つことはあまりない。学校の伝統を引き継ぐことを良しとして変化を求めようとはしない。だから，自ら課題を見いだし，自ら一歩踏み出そうという経験が少ない。また，失敗を恐れ全校の前で話をする時も，担任の顔を見て一度確認してから話を始める姿がよく見られる。人前で堂々と話をすることを苦手としている子どもが多い。これは少人数のため，子どもに求められると教職員もつい支援してしまったり，失敗させないように先回りして手を出したりしてしまうなどの要因がある。

子どもたちを取り巻く社会の状況は，とどまることなく変化している。そのような社会の中で，子どもたちが夢や目標をもって積極的に自らの未来を切り開いて生きていくためには，一人一人が自分の能力や可能性を信じ，学習したことを課題解決に生かす力や，多様な人々と連携しながら様々な社会の変化を乗り越えていく力と態度を育てることが不可欠である。このような力や態度を育成するためにキャリア教育の視点から学校経営を見直す必要があると考え，本題を設定した。

３　研究の視点

（１）キャリア教育の視点による学校経営の見直し
（２）校長の果たす役割と指導性

４　研究の実際

（１）キャリア教育の視点による学校経営の見直し

①学校教育目標の見直し

本校では令和３年度の学校教育目標を以下のようにして取り組んできた。

○学校教育目標:「心豊かに自ら学ぶ塚原っ子の育成」
○育成をめざす資質・能力 :「表現力」

学年末を迎え，「表現力」を柱にした児童評価・保護者評価・教職員評価等の結果，子どもの「表現力」は着実につきつつあるものの，まだまだ十分ではないことが把握できた。子どもの実態を踏まえて，今後子どもたちにつけたい力の洗い出しを行い，令和４年度の学校教育目標を決定していった。

特にその中で，子どもたちの姿で顕著となったことは，表現する場面での自信のなさであった。授業中の発言や朝の表現タイム・生活科，総合的な学習の学習発表の際の子どもの態度を見ていて，教員の皆が共通して感じたことであった。発表している内容は充実しているにも関わらず，表現するときに堂々と発表できず，どことなく自信がない様子が子どもたちからうかがえた。子どもの「表現力」において，さらに必要なことは自分の発言に自信を持たせることであった。そこで令

和４年度の学校教育目標を以下のように改善した。

○学校教育目標：「心豊かに自信をもって表現する塚原っ子の育成」 ○育成をめざす資質・能力表現力（説明する力）

改善した学校教育目標をもとに，グランドデザインを作成した。

グランドデザインの取組については，以下に示す学校評価の４点セットとともに，運営委員会の中で，共通理解を図った。

校長が取組の原案を出し，それをもとに協議し，分掌主任の役割分担を明確にした。そして各担任がどのような取組をすれば目標に迫っていけるのかを共通理解したうえで，学校評価の４点セットに位置づけた。

② キャリア教育の視点を生かす学校評価の４点セット

キャリア教育は，児童が社会的・職業的自立に向けて必要な基礎的・汎用的能力を育むものとされており，その基礎的・汎用的能力とは「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の４つに整理されている。

これらの能力は教育活動全体を通じて育んでいくことが望ましいことは理解しているものの，校長判断で本校の取り掛かりとして，まずは，子どもの「自己理解・自己管理能力」を高めることに絞って，キャリア教育に取り組むことにした。

「自己理解・管理能力」とは，自分が「できること」「意義に感じること」「したいこと」について主体的に行動し，自分の思考や感情をコントロールしながら自分の成長のために進んで学ぼうとする力とされている。

将来「なりたい自分」や「理想の自分の姿」を描き，未来を切り拓いていくためにも「自己理解・自己管理能力」は大切である。

「自己理解・自己管理能力」の育成は子どもの自尊感情を高めることから，本校がめざす「自信を持って表現できる子ども」にもつながると考えた。子ども一人一人のキャリア形成を図ることで表現力を高めていくことにした。

このようなことから，令和４年度は学校教育目標に迫っていくためにキャリア教育の視点を「学校評価の４点セットに位置づけ，学校経営を行っていくことにした。

令和4年度 塚原小学校 学校教育目標	心豊かに　自信をもって表現できる　塚原っ子の育成 ー地域とともに歩む学校ー		
	由布市立塚原小学校		表現力(説明する力)
	「心豊か」･･･○自分を認める心　○他人を認める心　○積極的に関わろうとする心　○平和を愛する心 「自信をもって表現」･･･○主体的に学ぶ力　○対話的に学ぶ力　○進んで表現しようとする力　○探求的に学ぶ力 「地域とともに歩む学校」（由布学）･･･○地域とつながり　○地域に学び　○地域を愛する		
１学期	重点目標	達成指標	重点的取組	取組指標
【生きて働く知識・技能】	基礎・基本を確実に身につける子ども	①国語・算数の単元末テストの平均が80%以上の子ども21/21 ②振り返りの視点にそって表現できた児童　21/21 ③「担任と連絡が密に取り、子どもの頑張りを褒めた」保護者　２１/２１	学校　○基礎学力の定着	○授業者は、スキルタイムの中で、国語の漢字や言語事項、算数の計算の補充学習を行う。　【教務】 ○授業者は、授業や単元の終末で振り返りの視点を明確にして表現(話す・書く）させ、月1回、研修の中で実践交流を行う。　【研究】
			家庭　○子どもの成長の把握	○保護者は学年通信や教職員との連絡・学期末の学級懇談会等で子どもの頑張りや成長の姿を知るように努めるとともに、子どもを認め褒めて励ます。
			地域　○地域と連携した学習活動	○ゲストティーチャーは、学習活動の中で、子どもと積極的に関わり、子どもたちの学びの様子で感じたことを学校へ伝える。
【未知の状況にも対応できる思考・判断・表現】	主体的に学び進んで考えを表現できる子ども	④「友だちに自分の気持ちや考えを、自信を持って話すことができた」児童　21/21 ⑤「子どもの思いや考えを聞くことができた」保護者21/21	学校　○表現力を伸ばす指導	○授業者は、子どもが自分の考えを進んで説明する授業を展開し、月1回研修の中で実践交流を行う。【研究】 ○担任は特別活動(学校行事・学級活動）において、めあて・中間の振り返り・週末の振り返りを行わせ、特別活動ファイルに綴じさせる。　【キャリア教育】
			家庭　○親子のコミュニケーション	○保護者は、宿題の見取りをしたり、毎日の学校の様子を聞いたりする中で、子どもの思いや考えを引き出す表現の場を持つ。
【学びに向かう力、人間性の涵養】	自信をもって発信できる子ども	⑥「学んだことを総合や生活の中で生かすことができた」児童　21/21 ⑦「全校の前で自信を持って発表することができた」児童　21/21 ⑧「いつでも、どこでも、だれにでも、気持ちよい挨拶ができる児童」家庭・児童・地域・教職員アンケートで平均９０％以上	学校　○発信する力の育成	○授業者は、教科で学んだことを生かした総合的な学習の授業展開を行い、学期に1回研修の中で実践交流を行う。（3学期に生活科・総合の学習発表を行う。）【研究】 ○授業者は、子どもの学習発表を授業の単元末に位置づけ、学期に1回表現タイムで発表させる。　【教務】
			家庭　○家庭内でのあいさつ運動の実践	○保護者は、「おはよう」や「おやすみ」に一言つけ加えたあいさつを率先して行う。また、学期に1回のあいさつ強化月間において家庭でのチェック活動を行う。　【生徒指導】
			地域　○児童との積極的な関わり	○ゲストティーチャーは、地域学習で総合・生活科の中で児童の学習に積極的に関わり、子どもの発表を参観し感じたことを、子どもや学校に伝える。
			地域　○地域の方々によるあいさつ運動	○各種子ども見守り団体は、あいさつ運動に月1回以上参加し、子どもたちの様子を見て感じたことを学校へ伝える。
【働き方改革】	仕事の効率化	⑨「かけはしを作成した教職員」　100% ⑩「効率化の視点で改善ができた教職員」　60%以上 ⑪「労安会議を毎月実施する」100%	学校　○校務分掌のスムーズな引き継ぎ	○全教職員は、引き継ぎ用「かけはし」を作成するとともに、業務効率化の視点で改善を行う。　【教務】
			学校　○業務の効率化	○全教職員は、負担軽減のための業務の見直しや改善提案を行う話し合いを月に1回行う。　【労安会議】
			家庭　○保護者の協力	○保護者は、奉仕作業（草刈り・プール掃除・池の掃除等）に積極的に参加する。

○重点的取組：表現力を伸ばす指導
○取組指標：担任は特別活動(学校行事・学級活動）において，めあて・中間の振り返り・週末の振り返りを行わせ，特別活動ファイルに綴じさせる。
【キャリア教育】

（２） 校長の果たす役割と指導性

① キャリア教育共通理解

大分県には，県教育委員会が作成した「未来をえがくキャリア・ノート！」が全児童に配布され，小学校１年から中学校３年生まで継続的に活用されている。このノートは，児童にとっては自己理解を深めるためのものであり，教師にとっては児童一人一人の様々な面に気づき，児童自身の自己の見通しに寄り添った関わりを通じて，理解を深めるものである。

しかし，本校ではキャリア・ノートの活用は校内での共通理解がされてない状況であった。前年度まで記入のさせ方については，各担任の認識に基づき行われていた。教育課程にはキャリア教育が位置付けられ，各教科・特活・道徳・総合的な学習や学校行事が配列されているものの，前年度を振り返るとキャリア・ノート活用の共通理解の機会はなかった。

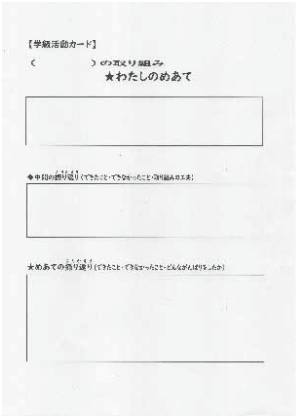
このようなことからキャリア・ノート使用の共通理解を図るため，校長から研究主任に校内研修の中で時間を確保すること，キャリア教育担当に研修内容の企画と運営をすることを指示した。この研修を通して，キャリア教育の意義やキャリア・ノートの役割の重要性を共通理解することができた。

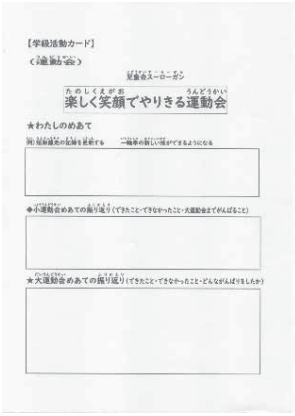
② モデルの提示

本校では，授業や活動の終末で振り返りを行うことで，自分の学びを言葉や文章で表現し，自分の変容や成長の自覚を促す取組を行ってきた。各教科や道徳科，総合的な学習などで行われてきた振り返りは，これまでも蓄積してきていた。その一方で，特別活動においては，その振り返りの蓄積がされていなかった。キャリア・ノートには，「学年はじめ」「年間を通じて（１・２学期）」「学年の終わり」の年４回，活動の振り返りを記入する機会がある。記入する際にその基礎資料として，各教科，道徳科，総合的な学習，特別活動などの振り返りを含む学習の記録を活用するとされている。その基礎資料を整えるため，道徳科や総合的な学習のファイルに加え，「特別活動のファイル」を新たに作成する必要があった。特別活動は，キャリア教育の要であることから，その作成意義の再確認も必要であった。

特別活動のファイルについては，校長とキャリア教育担当で原案を作成した。その後，キャリア教育担当が，担任が取り組むためのモデルを提案した。それをベースモデルにして，各学年の実態に合わせてより使いやすいようにアレンジして使用した。

毎月の運営委員会での取組の検証の中で，提案されたモデルをもとに，各学年が実態に合わせて，どのように子どもに書かせてきたか等を，実際に持ち寄り交流した。

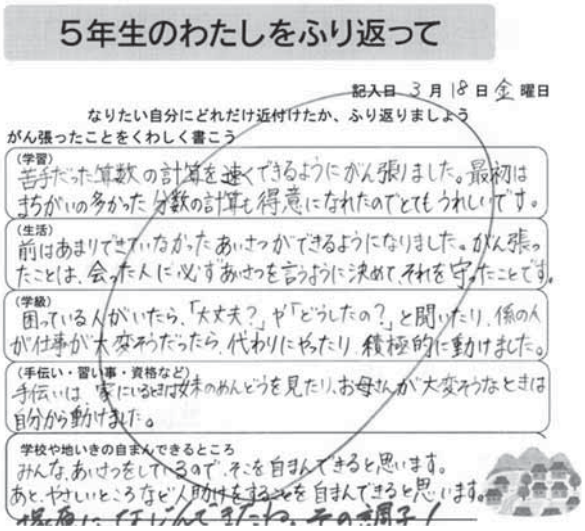




③ キャリア・ノートの記入について

子どもがどのように記入することをめざすのかを明確にするための共通理解も図った。

キャリア教育担当が校内研修の中で，これまで子どもが記入したものの中から，そのモデルとなるものを見いだし，全員で協議した。子どもの書きぶりの中から「どのような事を書かせるか」具体的に目指す内容を明らかにしていった。



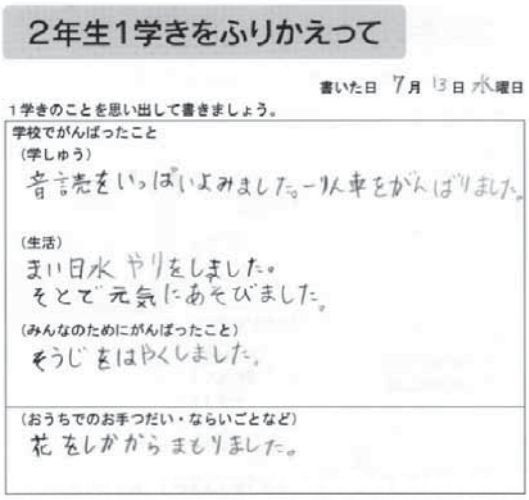
（高学年）

○計算をがんばったことだけにとどまらず，自分の成長したことに気が付いている。

（学習）

○友達との関わりの中で具体的な言葉かけや行動を書き，自分の役割を自覚している。

（学級）


2年生1学きをふりかえって

書いた日 7月 13日 水曜日

1学きのことを思い出して書きましょう。

学校でがんばったこと

（学しゅう）

音読をいっぱいよみました。一りん車をがんばりました。

（生活）

まい日水やりをしました。
そとで元気にあそびました。

（みんなのためにがんばったこと）

そうじをはやくしました。

（おうちでのお手つだい・ならいごとなど）

花をしかからまもりました。

（低学年）

○がんばった内容を具体的に書いている。

④　事例研修

教員でキャリア教育の具体的な視点を学ぶため，各学級の係活動を使って事例研修をキャリア教育担当が行った。学級の係活動は，どの学年でも取り組んでいる特別活動である。本校は少人数であることもあり，係活動のマンネリ化はどの学級でも抱える悩みであった。

その係活動をキャリア教育の視点を入れて見直した。係活動の視点を以下の４点とした。

・学級のために友だちと力を合わせて働くことの意義に気づく。

・多様性を認め合いながら，他の児童と力を合わせて働く大切さに気付く。

・自分の良さを生かし，工夫しながら自己の役割を果たすことができる。

・社会の一員として，責任を持って主体的に行動する。

この４点の視点で学級の係活動の見直しをすることにし，具体的な取組を共通理解した。

学期初め：係決め

学期中間：活動の振り返り（自己評価・相互評価）

活動の工夫（活動の見直し）

学期末　：振り返り

この取組を「特別活動ファイル」に蓄積すること，「キャンプ」や「運動会」・「みなこい祭」等の全校行事は全学年共通で「特別活動ファイル」を活用すること等も，共通理解することができた。

５　成果と課題

（１）　成果

①　グランドデザインや学校評価の４点セットにキャリア教育の視点を取り入れたことで，子どものめざす具体的な姿や育成すべき資質能力が，教員間で共通理解できた。

②　キャリア教育の具体的な取組を教員の共通理解を図るため，校長がリーダーシップをとり，研究主任やキャリア教育担当に指示して，研修を進めることができた。その中で，モデルを示したり，事例研修をしたりすることで，キャリア教育についての認識が深まり，具体的な取組についても共通認識のもと，組織的な取組ができた。「係活動の取組」や「各種行事」でも，めあて・中間の振り返り・終末の振り返りが行われるようになった。それが，学期末，学年末のキャリア・ノート記入の資料として生かされ，子ども一人一人が自己理解を深めることに効果を発揮した。

③　本校の課題であった「表現力」を高めるため，キャリア教育の４つの能力の中の「自己理解・自己管理能力」に絞ったことで，こどもの自尊感情を高めることにつながり，発表する子どもの姿にも変容が出てきた。

（２）　課題

①　本校のキャリア教育の組織的な組みは，自己理解・自己管理能力」に絞って取り組んだこともあり，まだほんの入り口の状況である。今後は，「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の３つも取り込み，総合的に学校経営に位置付けていく必要がある。さらに実践の積み重ねを行い，子どものキャリア形成の研究を深めていきたい。

６　おわりに

日常行っている学校の教育活動全体を，キャリア教育の視点で捉え直し実践へとつないでいくことの大切さを改めて感じた。子ども一人一人が学びや育ちを将来とつなぎながら「轍」をつくっていくキャリア教育を，今後も校長としてリーダーシップを発揮しながら，さらに進めていきたい。